



東日本大震災追悼式

大震災から5年となる3月11日、二本松市の総合葬祭ほうりんで浪江町東日本大震災五周年追悼式が行われ、ご遺族・ご来賓あわせて約140人が出席しました。式のはじめに参加者全員で黙とうをささげ、犠牲になられた方々のご冥福を祈りました。

馬場町長は式辞で、「復旧の正念場を乗り切れば、その先には本格復興期が待っています。その道も決して平たんなものではありません。しかし、その課題の大きさにひるむことなく、全ての浪江町民の皆さまと力を合わせて、『くらしの再建』と『ふるさとの再生』という復興理念を実現し、この震災からの復興を必ずや成し遂げんことを、ご霊前にぬかづき、お誓い申し上げます」と述べました。



続いて来賓の方々が追悼の辞を述べたあと、遺族代表として高校生の門馬芹香さんがマイクの前に立ちました。あの日、両竹に住む祖母を亡くした門馬さんの追悼のことばから、一部を抜粋してご紹介します。

追悼のことば

遺族代表 門馬 芹香



大津波や原発事故を起こした東日本大震災。あの震災から5年が経ちました。たくさんの方が命を奪われた中、私の祖母もその一人でした。

ばばちゃんの家に行くとき毎回「芹香ちゃん、いらっしやい」と言っていて、優しく抱きしめてくれたことを思い出します。少し照れ臭く感じながらも、とても嬉しかったのを覚えています。

田植えの時期になると、家族で手伝いに行っていました。田んぼを耕すばばちゃんの真似をして、「大丈夫！」と何度も言って足を突っ込み、結局歩けず助けてもらっていました。

毎年のようにそんなことを繰り返していた私には、ばばちゃんの姿が格好良く見えました。いつも優しく、明るく、いばばちゃんがとても大好きでした。しかし、あの震災がその全て

を奪っていききました。当時、小学5年生だった私は授業中でした。地震で校庭へ避難した後、津波注意を呼びかける消防車のサイレンを聞いていました。ふと、ばばちゃんの家が海の傍であることを思い出して、もしかしたら津波が...という不安が頭をよぎっていました。それが現実になっているのを知ったのは家へ帰ってからでした。

私は、最後にいつ会って、どんな会話をしたのか、覚えていません。クラブ活動であまり会いに行かなかった自分への後悔が、ただただ残るばかりでした。地震の次の日、ばばちゃんを探しに浪江を訪れて以来、一度も浪江には行っていません。5年が経った今でも、ばばちゃんが亡くなったこと、津波で昔のような浪江の景色はもう無いこと、これらを受け入れられない自分がいるのです。

ですが、5年が経ったのです。私は高校生になり、浪江に立ち入れるようになりました。気持ちの整理をつけ、もう一度浪江に行こうと思っています。そして、これからも、どんなことにも負けず、亡くなった方々の分まで精一杯生きていきます。あの震災は決して忘れてはならないと思っています。忘れないために私ができることは何なのか、考えていきたいです。